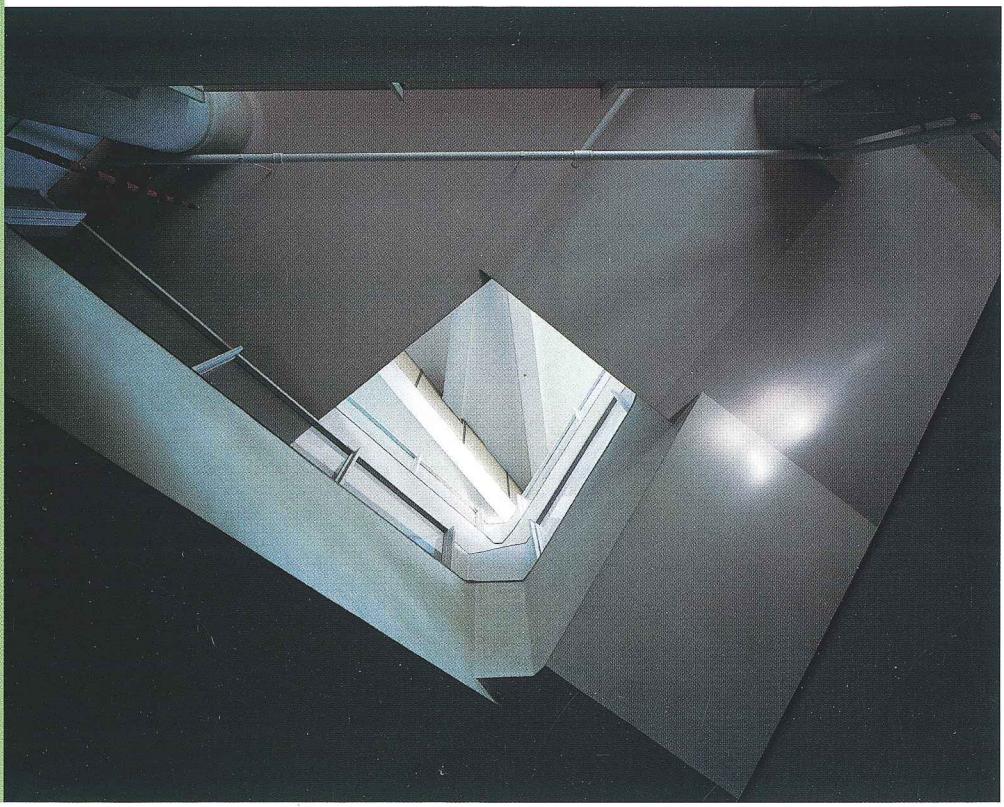
文部科学省認可通信教育　慶應義塾大学通信教育部

三色旗

2013 10
No.787

SANSHOKUKI

特集：英語の学び方



特集　英語の学び方

ニッポン映画で英語学習！

井上逸兵

テクノロジーと外国語学習

時代とともに道具やテクノロジーも進歩し、それとともに学習の形態が変わるのは世の常です。外国語の学習方法ももちろんその例外ではありません。

英語（他の外国語にも当てはまりますが、今後「英語」ということにします）の、特にリスニング、口語的な表現や場に即した表現の学習の道具、および材料として、映画は以前から用いられてきましたが、ビデオとレンタルビデオ業の登場で映画の利用度はより高まりました。そして、ＤＶＤによって、英語字幕を見られるという利点がさらに加わりました。

ＤＶＤ版映画による英語学習には、もうひとつ有効、有用な素材があります。意外に思われる向きもあるかもしれませんが、それは英語字幕のついた（できれば吹替えも）日本映画です。まさに、ＤＶＤ時代の英語学習素材です。なぜ日本映画が英語学習の素材として有効なのでしょうか。本稿では、その有効さ、有用さの要点を、実例を交えて示したいと思います。

英語学習に日本映画が有効なワケ

まずは、日本映画（ＤＶＤ版）の字幕・吹替え訳の特性

にふれておきましょう。翻訳にはオリジナルとの「ズレ」がつきものですが、字幕や吹替翻訳の特性は主に一画面あたりの文字数と時間という物理的な制約があることが原因です。映像と台詞とを同期させるよう逐語訳はできないため、前後の会話と自然につながるように「ズレ」が甚だしくなることもあります。興味深いことですが（この学習にとってはありがたいことになりますが）、そのような訳には文化的な要因が入り込みやすいのです。文化的につじつまの合う、その言語の話者にとって自然に感じられる訳にしなければならないからです。

そのような訳の根底には英語・日本語それぞれのコミュニケーションの文化の原理、いわばコミュニケーションの「タテマエ」が働いています。字幕翻訳固有の制約があるからこその「ズレ」はその「タテマエ」の産物であり、日本人の英語学習、特に言語の文化的側面の学習に非常に有効なのです。

以下に、日本映画の英語字幕・吹替えを具体的に見ながら、英語、英語圏の文化的側面をいくつか紹介します（学問的にはかなり単純化した話になっていますが、本企画の主旨から大目に見ていただければと思います）。

英語の「タテマエ」学習

いかに英語字幕が有効でも、ただ見ていればよいというわけではありません。英語コミュニケーションの背後にある、文化的前提、いわば「タテマエ」を理解することが重要です。コミュニケーションにおける英語圏文化の根本を知り、日本文化の根本を自覚する必要があるのです。タテマエというと、日本独特と思われるかもしれませんが、日本の専売特許ではありません。どの文化にもあります。ただ、自分の文化のタテマエには気づきにくいだけです。タテマエは、文化の（礼儀上）「……というフリをする」、「……することになっている」という部分で、実際にそうかは必ずしも重要ではありません。そういうフリをするのが、いわば「礼儀」なのです。

英語圏（とりあえず、アングロサクソン的と考えておきましょう）のタテマエは、基本的に、連帯のタテマエ、独立のタテマエ、対等のタテマエの三つからなり、加えて、その三つのいずれかの発展型、もしくは複合型があります。

連帯のタテマエは、友好、親密、関わりのタテマエです。例えば、相手をファーストネームで呼ぶのは実際に親しさの表れでもありますが、親しい、よく思っている、気遣っている、関わりを持っている「フリ」をするのが連帯のタテマエ的行動でもあります。

独立のタテマエは、相手も自分も独立している、自由である、お互いに侵害しあわない、相手の意志を尊重している、という想定です。英語に特徴的なWould you like to …?やCould you …? などの間接的な勧誘や依頼のしかたは、このタテマエの反映です。相手に押しつけないで、相手の意志を尊重している「フリ」をするのが礼儀です。

この二つのタテマエは、基本的にどの文化にもあり、場面や話題によってどちらかが優先されればどちらかがひっこむという意味で表裏一体のものです。どちらが優先されるかはそれぞれの文化特有のバランスがあります。

三つめの対等のタテマエは、英語圏に特徴的です。日本のタテマエと大きく異なり、「私とあなたは、たとえ社会的地位や年齢などが違っても対等です」というタテマエです。どちらが上でも下でもないという「フリ」であり、「あなたは上、私は下」という日本のタテマエと対照的です。

以下、事例にそって三つのタテマエとその発展型、複合型を通して、日本映画の英語字幕による英語学習の主な目的を説明しましょう。

連帯のタテマエ

決まり文句（定型表現）は一般にその言語と文化の慣習が生み出した、その言語固有のもので、翻訳不可能な場合が多くあります。しかし、ここでもタテマエは作動しています。例えば、初対面の挨拶をする時に、英語では、"Nice to meet you."などの表現がありますが、これは関わりをポジティブにとらえようとする連帯のタテマエの反映です。一方、同じような状況で、日本語の話者が通常用いるのは「よろしくお願いします」ですが、これは英語に逐語訳すると、極めて奇異な印象を与えることになるでしょう。なぜなら、「私はあなたに頼る下位者」という日本的タテマエは、お互いが独立していて、頼らなくてよい、無条件に「よろしく」してくれなくてもよい、という英語の独立のタテマエに反するからです。

具体的な例を見てみましょう（以下、「　」内の日本語がオリジナル、→以下は英語字幕訳）。

(1)「引っ越してきましたー。よろしくお願いしまーす。」
→"Looks like we're going to be neighbors! *Pleasure to meet you!*"（『となりのトトロ』）

(2)「ともかく新人ですのでよろしくお願いします。」
→"I'm a new comer here, and *I look forward to your cooperation.*"（『ウォーターボーイズ』）

これらの英訳は定型句を訳す際の二つの典型例と見てよいでしょう。一つは、(1)のように、それぞれ字義的には異なった意味を持っていますが、同じような状況で対応する定型表現を訳としてあてている場合で、状況的等価（situational equivalence）を意図したものです。もう一つの翻訳方略は、できるだけオリジナルの意味を反映させようというものです。ただし、重要なことは、(2)のように、たとえ「よろしくお願い」することを実質的な（たんなる儀礼的な挨拶ではなく）依頼とするにしても、自分を下位者とした他者依存的な依頼（嘆願）という訳にはなっていないということです。独立と対等のタテマエのなせるわざです。

独立のタテマエ

「アメリカ人は自己主張が強い」というステレオタイプもよく耳にしますが、よく観察すると、これも半分当たっていますが、半分当たっていません。「独立」のタテマエは、たしかに自分の意志が尊重されるタテマエなので、自分の主張を表明することに、日本人のようには抑制がかかりません。ただし、このタテマエによると、相手の独立も尊重することになるため、相手に指図をしたり、押しつけがましいことを言ったりすることは避けるのが英米的なタテマエです。『千と千尋の神隠し』では、

(3)「いまカマジイのとこいかねえ方がいいぞ」
→"I wouldn't go to Kamajii now."

という訳がありますが、オリジナルの、相手に指図するような言い方は、英米の独立のタテマエに反するということでしょう。「私ならいかないだろう」という、相手の独立性を尊重した、押しつけない言い方で訳されています。先にも触れたように英語には間接的な形式が多くあります

が、相手の意志を尊重する表現が慣習化しているのです。この点では、日本の方がズケズケと言う言い方をする傾向があるかもしれません。

『となりのトトロ』で、書斎の戸が開け放たれた庭で娘メイが遊ぶシーンでは、メイが摘んだ花をいくつか父親の机にならべて言う台詞は、

(4)「お父さん、お花屋さんね」
→"Dady, I'm a flower lady."

となっていますが、この情景を見たほとんどの日本人は瞬時に、かつ自然に「お父さんは、お花屋さんの役だよ。（やってね。）」と理解するでしょう。一見、誤訳であるかのようにも見えます。しかし、他の多くの事例と合わせて見ると、これが独立のタテマエに根ざしていることがわかります。たとえ相手が父親であっても（自分が小さな子どもであっても）相手の独立を脅かすこと（お父さんにお花屋さんの役を強要すること）には抑制がかかっているのです。

対等のタテマエ

このタテマエが典型的に反映されるのは、日本語が自己卑下的表現の場合です。

(5)「私、空飛ぶしか能がないでしょ　だからお届けやさんはどうかなって」
→"*I have one skill—flying*—so I thought a delivery service was a good idea."（『魔女の宅急便』）

「能がない」という自己卑下的表現は、「自分は下位者」という日本のタテマエに合致しますが、英語のタテマエには反してしまうため、(5)のような上下関係を表さない訳になります。

英米人は謙遜しないと思っている向きもあるようですが、それは誤りで実際には英米人もします。日本の謙遜の原理は、「自分を下げることによって相手をあげる」というものですが、英米の謙遜は自分が褒められすぎる（と感じる）と、対等というレベルまで降りてくるという謙遜です（ですからあまり謙遜を引きずりません）。相手より下

にまでは自分を下げることはしないのがふつうです。対等がタテマエ上、望ましい状態で、そこに復帰しようとする謙遜なのです。

日本映画の利点

紙幅の都合で挙げきれませんが、以上のような視点で日本映画を英語版で見てみると、多くの類例を見つけることができると思います。オリジナルとは違った映画に見えてくるかもしれません。それこそが「英語らしさ」の一部なのでしょう。日本人として（日本語で）自然に振る舞うことと、英語圏で自然に振る舞うこととが異なっていることがよくわかると思います。日本人的動作が英語圏的な吹替えの台詞となんとなく合わずに違和感を覚えることもあるかもしれません。それもおもしろいところです。

英語の映画の日本語訳でも同じような学習ができると思うかもしれませんが、事情が少し違います。なぜなら、これまでの英語文化の日本への大量流入で、日本語には「翻訳調文体」なるものができあがっているからです。「何が彼をそうさせたのか」などの英語的構文を如実に反映する翻訳日本語もいまや多くの日本人にとってさほど違和感のある文体ではなくなりました。自然な日本語にしようとした方が、日本語の文化的側面やタテマエが表れやすいのです。

それにつけても、この学習素材の最大の利点は、利用しやすいということでしょう。ＤＶＤ再生機も比較的安価になり、レンタルビデオ店が近所にあれば、こんなお手軽な方法はありません。家庭でできる（笑）異文化コミュニケーションです。楽しみながらぜひ継続的に実行してほしいと思います。

〔いのうえ　いっぺい　慶應義塾大学文学部教授、社会言語学、英語学専攻。主要業績―ヤムナ・カチュルー、ラリー・Ｅ・スミス『世界の英語と社会言語学――多様な英語でコミュニケーションする』（共訳）慶應義塾大学出版会、二〇一三年。『くらべてわかる英文法』（共著）くろしお出版、二〇一二年。『サバイバルイングリッシュ』幻冬舎エデュケーション、二〇一一年。『ことばの意味と使用――日英語のダイナミズム』（共著）鳳書房、二〇一〇年。『ことばの生態系――コミュニケーションは何でできているか』慶應義塾大学出版会、二〇〇五年。*Advances in Discourse Approaches*（共著）Cambridge Scholars Publishing, 2009.『応用言語学事典』（共著）研究社、二〇〇三年。〕